文化財だより

ふるさと再発見

最終回 信仰を盛り上げた三十三所観音ミニ霊場

土岐津町土岐口の広福寺境内金毘羅様社殿横に、古い三十三所観音像群があります。地蔵と思われる像やそのほかのものと合わせて五十体余りが、三段の雛壇（ひな）に置かれています。寺は、明治二十四年（一八九一年）に同地区内の広徳寺と保福院が合併し、現在地に移転しましたが、広徳寺は江戸時代初期に創建されていて、石像はそのころのものが後世に一体ずつ背負われ、移されたといわれています。

西国三十三所観音霊場の巡礼は、それらを巡拝することで功徳を受け、冥福を得るという、観音菩薩への強い信仰のかたちとして、古くから伝えられてきました。鎌倉・室町時代になると、西国以外でも秩父・最上などに霊場が開かれ、江戸時代には、全国各地に百四十カ所を超える地方の霊場が開かれて、巡礼も大変盛んになりました。

西国巡礼は、東濃から数カ国、数百里にまたがる三十三カ所という多数の寺院を、四十日～六十日もかけて参拝する旅になるとともに、費用もかかり大変なことでした。信仰心が厚くても、庶民の誰もができることではなく、そのため県内でも岐阜を中心に美濃三十三所観音札所が設けられました。元禄八年（一六九五年）に、旧土岐郡内でも土岐三十三所が設けられました。一番は大富村延命寺で、最後が久尻村の清安寺、十五番が広徳寺で、信仰深い庶民の巡拝を容易にしたことでした。

三十三所観音像群

教育夢発信

妻木小学校「さだみつさん こんにちは」

本校の学校評議員でもある田中貞光さんが教室に入ると、あちらこちらから「こんにちは」の声がかかります。こんな声がかかるのも普段から、畑の先生「畑名人」として二年生の生活科の授業にご協力いただいているからです。

春の畑作りから始まって、うねきり、野菜の苗植え、種まき、施肥、収穫と節目節目に子どもたちだけでなく、職員にも助言をいただいています。

収穫した野菜は、みんなで食べます。一年間の収穫を祝う「イモパーティー」では、お母さん方の協力を得て「イモきんとん」「蒸しパン」「スイートポテト」をつくりました。田中さんも招待して、一緒にパーティーを楽しみました。

妻木小学校では、田中さんをはじめ多くの方々に、授業の「アドバイザー」としてご協力いただいています。

イモほりを指導するさだみつさん

『カブとダイコンを植えたよ』

イモをほった後の畑に、ダイコンとカブの種を植えました。カブの種は、アサガオの種ぐらいと思っていましたが、あんなに小さな種が何であんなに大きなカブになるかふしぎです。さだみつさんにも聞いてみたら、「みんなが水やえいようをあげるからだよ」と教えてくれました。

保護者と一緒に「イモクッキング」